

反アザラシ漁運動をめぐる一考察

——その歴史的経緯と現況について——

浜 口 尚

1. はじめに

1800年から2006年までの間、カナダ大西洋岸地域¹⁾においてはタテゴトアザラシを中心とするアザラシ類が4441万頭以上²⁾、商業目的で捕殺された。この数字だけを見れば、あるいはその多さに驚くかもしれない。しかしながら、2004年調査に基づく2006年のタテゴトアザラシの生息数推計582万頭³⁾という別の数字を見れば、また違う印象をもつであろう。タテゴトアザラシは何と強固な生物資源であるのだろうか…。

生物資源は適切な管理がなされれば、持続的に利用可能である。それはアザラシ類でも鯨類でも同じである。また、合法的かつ持続的である限りにおいて、生物資源の利用によって利益を得ることは健全な行為であり、倫理面を含めて何ら問題はない。石炭、石油のような非生物資源（鉱物資源）の非持続的（消費的）利用のほうが人間生命および地球環境に与える影響ははるかに大きい。簡単に言えば、アザラシ皮コートのほうが化学繊維製コートよりも人間にも地球にも優しいのである。しかしながら、この自明の事実は仔アザラシの見かけの愛くるしさによって隠蔽されてきたのであった。

以下、本稿においてはアザラシ類の捕殺およびアザラシ皮製品の利用に反対する運動（反アザラシ漁運動）を批判的に考察する。拙稿によって、読者各位に反アザラシ漁運動の不健全性をご理解いただければ筆者としては幸甚である。

2. アザラシ漁の生物学

最初にカナダ大西洋岸地域におけるアザラシ漁の理解にとって最低限必要であるアザラシ類の生物学的知識について簡単にみておく。

アザラシ類は生物学的にはアザラシ科（Phocidae）に含まれ、アシカ科（Otariidae）、セイウチ科（Odobenidae）と共に鱗脚亜目（Pinnipedia）を構成している。アシカ科、セイウチ科、アザラシ科の違いは次のとおりである。前2科は後肢を前方に曲げることが可能であるが、アザラシ科は不可能であり、一方、アシカ科には小さな外耳があるが、後2科には外耳はない（和田・伊藤 1999: 18-19）。従って、鱗脚亜目の中ではアシカが最も陸上生活に適応し、アザラシが最も水

中生活に適応していることになる。

アザラシ科は 10 属 18 種からなり、主として南半球に分布するモンクアザラシ亜科（8 種）と北半球のみに分布するアザラシ亜科（10 種）に下位区分されている（和田・伊藤 1999: 24）。

カナダ大西洋岸地域では 6 種のアザラシ、すなわちタテゴトアザラシ（harp seal）、ズキンアザラシ（hooded seal）、ハイイロアザラシ（grey seal）、ファイリアザラシ（ringed seal）、アゴヒゲアザラシ（bearded seal）、ゼニガタアザラシ（harbour seal）が見出される（DFO 2003: 3）。これら 6 種のうち、タテゴトアザラシ、ズキンアザラシ、ハイイロアザラシが商業捕殺の対象とされているが、2006 年漁期における商業捕殺の 99% 強はタテゴトアザラシが占めている⁴⁾。

タテゴトアザラシには 3 つの個体群、すなわち北西大西洋（Northwest Atlantic）群、白海（White Sea）群、ヤン・メイエン島（Jan Mayen）群があり、北西大西洋群が最大の集団を構成している（DFO 2003: 3）。カナダ大西洋岸地域のアザラシ漁師が捕殺対象としているのがこの北西大西洋群である。

北西大西洋群タテゴトアザラシの 2004 年調査に基づく 2006 年の生息数推計は 582 万頭、2006 年の商業捕殺数は 35 万 4867 頭となっている⁵⁾。タテゴトアザラシの商業捕殺の多くは「フロント」、すなわちニューファンドランド島の北東岸沖、南ラブラドル沖で実施され、残りは「ガルフ」、すなわちセント・ローレンス湾内（特にマグダーレン諸島周辺）で実施されている（DFO 2003: 4-5）。1993 年から 2002 年までのタテゴトアザラシの捕殺数統計によれば、フロントでの捕殺が 69% を占めている⁶⁾。

タテゴトアザラシは出生後、その成長段階（毛皮の状態）に応じて、呼び名が変わる。北西大西洋群タテゴトアザラシのメスは 2 月の終わり頃から 3 月半ばにかけて氷盤上で出産する。新生仔は黄白色の産毛をもち、「ホワイトコート」（whitecoat）と呼ばれている。出生後、10 日から 2 週間程度で毛の生え替わりが始まり、同時期に離乳をする。この毛更りの状態にある仔アザラシが「ラグド・ジャケット」（ragged-jacket）で、換毛は 2 週間程度続く。出生後 4 週間経ち、完全に毛が生え替わり、灰色の毛に黒い斑点ある状態になったのが「ビーター」（beater）である。やがてビーターは海に入って泳ぎ始め、自ら餌を捕り出す。ビーターは翌春、生後 13、14 か月で 2 度目の毛更りをする。毛皮上の斑点模様が消え、背中に「竖琴」の形が現れ出すと性的成熟の始まりである（写真 1）。タテゴトアザラシは約 4 歳で性的成熟に達し、メスは 5 歳の誕生日以降、出産可能となる。この 2 度目の毛更り後、繁殖可能年齢に達するまでのアザラシが「ベッドラマー」（bedlamer）である（Bruemmer 1975: 44; Candow 1989: 14; Lavigne and Kovacs 1988: 13, 41, 42, 44; Sergeant 1976: 96, 98）。

タテゴトアザラシの商業捕殺は 1983 年まではホワイトコートを主対象として実施されてきた。しかしながら、同年 2 月、欧

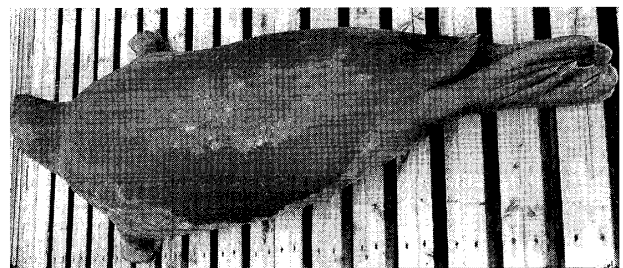


写真 1 タテゴトアザラシ（撮影：浜口 尚）

州共同体が幼獣アザラシの皮と製品の輸入を禁止したため、ホワイトコートの捕殺が事実上不可能となった。その結果、翌年以降はビーターに捕殺の中心が移され、その状態が今日（2007年）まで続いている。

3. 反アザラシ漁運動の動静

3.1. プロローグ

この起こりは1964年であった。同年、モンリオールの映画制作会社アーテック・フィルム社（Artek Films）がカナダ国営放送局（CBC）のフランス語版番組ネットワークから資金提供を受け、マグダーレン諸島におけるアザラシ漁を取材、「氷盤上の高貴なアザラシたち」（“Les Grands Phoques de la Banquise”）と題する番組が5月にケベック州で放映された（Barry 2005: 18）。そしてその番組の中に「1頭のアザラシが生きながら皮を剥がされ、その死骸が氷の上で痙攣するがままに残されていた」（Candow 1989: 117）というような場面が含まれていたのであった。

この番組の試写を見たドイツ生まれでモンリオールのドイツ語版週刊誌の編集者であったピーター・ラストが「殺戮の島」（“Murder Island”）と題する記事を執筆、その記事が後に欧州の新聞ほか300余紙（誌）に転載され、欧州における反アザラシ漁運動の引き金となったのであった（Coish 1979: 75; Barry 2005: 18-19）。

その記事の抜粋をラスト自身が後に自著の中に再録している。

アザラシ漁師たちは小さく、無邪気で、無力な赤ちゃんを殺している。犠牲者は人間ではなく、アザラシの赤ちゃんである。ひとかけらの人間性をも喪失した人間集団がこれらの哀れで無力な動物の皮を生きたまま剥いでいる。[...] 漁師たちは小さな犠牲者に近づき、それを蹴り、ひっくり返し、のどを切り裂く。しばしばその動物は生きたまま皮を剥がされる。無力な赤ちゃんは最後の苦痛の叫びを上げている。（Lust 1967: 49）

ラスト自身は1966年に「仲買人を通さず現場で直接毛皮の購入を希望するモンリオールの毛皮商」（Lust 1967: 98）と称してアザラシ漁の現場を取材するまではアザラシ漁を見たことはなかった。彼はアザラシ漁の現場を見ずに、テレビ番組の試写を見ただけでアザラシ漁を残酷なものとする記事を書いたのであった⁷⁾。後に、「アーテック社のフィルムが真実であることに疑いはない」（Lust 1967: 46）と述べているが、その根拠は示されていない。

ラストはアーテック社の製作した番組に一方的に肩入れしているが、同番組の信憑性を根本から覆す証言もある。同番組を見たトロント大学の動物学者ダグラス・ピムロット⁸⁾は、アーテック社の撮影現場にはいなかったが、照準器付きのライフル銃でアザラシを銃撃している人物および生きたアザラシを切り裂こうとしている人物は撮影スタッフであったと指摘している（Coish

1979: 74)。また、番組中に生きたアザラシの皮を剥いだ人物の「私は、[...] 映画撮影用に大きなアザラシの皮を剥ぐために雇われていたことを陳述します。私はそのアザラシを苦しめることを求められ、また通常の慣行においては、アザラシの皮を剥ぐ前に、アザラシを殺す目的で最初にこん棒が用いられるところで、こん棒を使うのではなく、その作業を実行するためにナイフの使用を求められたことを証人の前で厳粛に陳述します」(Davies 1971: 102-103) とする宣誓供述書もある。

番組制作から40年以上も経過し、番組自体の再見が不可能である以上、同番組が「やらせ」であったかどうかについての判断は留保せざるを得ない。しかしながら、アーテック社の制作した番組が大衆の間に反アザラシ漁運動を受け入れる土壌を形成し、その普及に大いに貢献したことは事実である⁹⁾。

一時期反アザラシ漁運動を引っ張ったラストのその後の消息は定かではない。一方、彼とほぼ同時期に、時に彼と協力して反アザラシ漁運動に取り組み、その後40年間、反アザラシ漁運動一本で生きてきた人物がいる。その人の名は次節で取り上げるブライアン・デーヴィーズである。

3.2. ブライアン・デーヴィーズと IFAW

1965年3月12日、私は初めてセント・ローレンス湾のタテゴトアザラシの出産場を訪れて、その魅力の虜となった。それ以来、私は人生をタテゴトアザラシの保護に捧げることにした。私にとってタテゴトアザラシは地球上で最もいとoshii創造物である。(Davies 1988: ix)

ニュー・ブランズウィック動物虐待防止協会 (New Brunswick Society for the Prevention of Cruelty to Animals) 事務局長であったデーヴィーズは1965年3月12日、上記のように初めてタテゴトアザラシに出会い、その魅力の虜となった。そして翌13日、初めてアザラシ漁を目撃、アザラシを撲殺する方法に吐き気を催した (Candow 1989: 118)。

デーヴィーズは2匹のホワイトコートを家に連れて帰り、その餌代を確保するために協会内に「アザラシ救援基金」(Save the Seal Fund) を設置、同年秋から同協会はその基金を用いてセント・ローレンス湾内での大型アザラシ漁船によるアザラシ漁に反対するキャンペーンを開始した (Barry 2005: 20)。

デーヴィーズはアザラシ漁を廃絶に追い込むために3重の戦術を考案した。すなわち、①カナダにおいてアザラシ漁の継続に反対する大衆の態度を創出し、②欧州においてタテゴトアザラシの生皮購入への嫌悪感を促進し、③毎年の大虐殺の中止を望むカナダ人への海外からの支援を要請する、であった (Davies 1971: 62)。そして、その戦術の遂行のためには「カラー写真付きの雑誌記事が効果的」(Davies 1971: 63) との結論に至った。愛らしいホワイトコートの血生臭い

撲殺はメディアと大衆を反アザラシ漁陣営に引き入れるのに十分なイメージであった。

1966年のアザラシ漁期にあわせてモンリオールの『ウィークエンド・マガジン』(*Weekend Magazine*)がデーヴィーズの提供した写真と原稿に基づく記事を掲載し(cf. Davies 1971: 62-92)、また1968年のアザラシ漁をデーヴィーズの段取りでイギリスの『デイリー・ミラー』(*Daily Mirror*)が取材し記事を掲載(cf. Davies 1971: 143-164)、同じく1969年のアザラシ漁をデーヴィーズの段取りでフランスの『パリ・マッチ』(*Paris-Match*)が取材し記事を掲載するなど(cf. Davies 1971: 165-181)、デーヴィーズの思惑どおりにことは運んだ。デーヴィーズはメディアのもつ力を十分に理解していたのであった。

1969年、ニュー・ブランズウィック動物虐待防止協会のいくつかのメンバーがアザラシ漁問題のためにニュー・ブランズウィック州の動物福祉問題が犠牲にされていると感じたため、デーヴィーズは同協会を離れ、持ち出すことを認められたアザラシ救援基金を母体にして国際動物福祉基金(International Fund for Animal Welfare; IFAW)を創設した(Candow 1989: 121-122)。

1965年以降、デーヴィーズはメディア同伴で氷盤上のアザラシ漁の現場に出かけて、メディアの報道を利用したキャンペーンを張り、アザラシ漁の廃絶という長期的な戦略に基づく個々の作戦を実施した。同キャンペーンは1969年以降、IFAWの勢力拡大にも大きく貢献した。しかしながら、同じことを10年も続ければ、メディアにも大衆にも飽きがかかる。1975年頃には大衆のアザラシ漁に対する関心は減退し、デーヴィーズがレポーターを引き寄せるのには困難を伴うようになった(Barry 2005: 37)。そこで彼は戦術を変えた。

1976年、アザラシ漁の開始前にデーヴィーズはニューファンドランド島グレート・ノーザン半島北端の町セント・アンソニーに7人のアメリカ人スチュワードスを連れてきた(Coish 1979: 135)。彼は「氷盤上への無邪気なスチュワードスの出現はアザラシ漁を男らしさを象徴する活動とみなしている神話を剥ぐのに役立つであろう」(Coish 1979: 135)と期待し、「若くて魅力的な女性が氷の上で毛皮の取引に反対するのは劇的な振る舞いであり、メディアの注目を引くであろう」(Barry 2005: 37)と考えた。彼の戦術は成功し、またまたメディアの目は美女に、アザラシ漁に向けられた。

1977年、デーヴィーズはセント・アンソニーに魅力的な金髪女優イヴェット・ミミュウを同伴¹⁰⁾、一方、グリーンピース(Greenpeace)と協力関係にあったスイス人の反アザラシ漁運動家はブリジット・バルドーをセント・ローレンス川北岸の町ブラン・サブロンに連れてきた(Coish 1979: 151, 154-155)。その町でバルドーは1頭の若いアザラシを抱きしめ、その写真が『パリ・マッチ』の表紙を飾った(Coish 1979: 161)。このバルドーの行動はジスカール・デスタン仏大統領の幼獣アザラシ製品の輸入禁止をめざすという約束をもたらした(Barry 2005: 42)。結果的には禁止されなかったとはいえ、有名人の影響力を証明した出来事であった。

1977年夏、デーヴィーズはカナダ産アザラシ皮の市場調査を委託、同調査の結果、カナダ産アザラシ皮の販売先のほぼ90%は欧州諸国(主要輸入国はイギリス、フランス、西ドイツ、スウェーデン、デンマーク)が占めていることが明らかになった(Barry 2005: 44)。同年10月、

彼はアザラシ生皮市場を破壊するために欧州における大衆圧力の結集をめざす IFAW の計画を明らかにし、1978 年初めにキャンペーンに着手、イギリス、西ドイツ、イタリア、オランダ、フランスにおいて記者会見を開き、タテゴトアザラシ製品およびズキンアザラシ製品輸入禁止のための消費者ボイコットと政府への働きかけを開始するように支持者に呼びかけた (Barry 2005: 51)。

このデーヴィーズおよび IFAW のキャンペーンは功を奏した。1978 年春、フランス政府はフランス毛皮加工業者協会と幼獣アザラシの生皮を輸入しないことで合意し、同年 6 月、イタリア外国貿易大臣は幼獣アザラシ皮の通関を禁止する命令を発布した (Barry 2005: 54)。これ以降、欧州においては幼獣アザラシ皮の輸入禁止に向けての機運が高まっていく。

3.3. 反アザラシ漁運動の帰結

IFAW は 1980 年代に入ってからでも欧州において活発にアザラシ製品ボイコット・キャンペーンを展開した。IFAW は同団体の支持者に自筆の手紙、あるいは印刷済葉書の目標組織への送付を依頼するという手法で、1982 年 2 月までに欧州議会 (European Parliament) に対して欧州共同体におけるアザラシ製品のボイコットを要求する 300 万通の郵便物を送付した (Candow 1989: 136)。

その結果、1982 年 3 月、欧州議会は欧州委員会 (European Commission) に対して若いタテゴトアザラシおよび若いズキンアザラシから由来している全ての皮と製品などの欧州共同体への「規則」(regulation)¹¹⁾による輸入禁止の法案化を要求する決議案を採択した (Barry 2005: 62)。これ以降、欧州共同体の立法機構¹²⁾に従い、IFAW のめざした欧州におけるアザラシ製品の禁輸は着々と進んだ。以下、その進捗状況を列記しておく。

1982 年 10 月、欧州委員会は 1983 年 3 月 1 日からタテゴトアザラシおよびズキンアザラシの幼獣の皮とその派生品の輸入禁止を実施するための共同体規制を求める法案を採択した (Barry 2005: 65)。

1983 年 2 月、閣僚理事会 (Council of Ministers) は全ての幼獣アザラシの皮とその製品の欧州共同体への輸入を禁止する「命令」(directive)¹³⁾を採択、その禁止は 1983 年 10 月 1 日から 2 年間に及ぶものであった (Barry 2005: 69-70)。

1985 年 9 月、閣僚理事会は輸入禁止を 1989 年まで延長する包括的の命令に合意し、1989 年 6 月、同理事会は輸入禁止を無期限に継続することを承認した (Barry 2005: 105, 123)。

これら一連の欧州共同体における法規制の結果、カナダは 1984 年よりホワイトコートやブルーバック (ズキンアザラシの幼獣) などの皮とその製品を欧州諸国に輸出できなくなった。

アザラシ皮およびその製品禁輸法案が制定途上にあった 1983 年、大型アザラシ漁船はガルフのアザラシ漁に 2 隻、フロントのアザラシ漁に 1 隻が出漁したのみに終わり、同法案が施行された 1984 年、大型アザラシ漁船は 1 隻も出漁しなかった (Candow 1989: 137-138)。1982 年に 16 万 6379 頭あったタテゴトアザラシの捕殺数は、1983 年 5 万 7889 頭、1984 年 3 万 1544 頭、1985

年1万9035頭と大幅に減少した (IFAW 2007: 16 Appendix I)。アザラシ漁師からアザラシ生皮加工会社への生皮の売り渡し価格も1983年には前年より半減、1枚13ドル¹⁴⁾となった (Candow 1989: 137)。このように欧州共同体によるアザラシ皮およびその製品の禁輸はカナダ大西洋岸地域の商業アザラシ漁師に大打撃を与えた。

しかしながら、商業アザラシ漁師以上に壊滅的な打撃を被ったのはタテゴトアザラシやズキンアザラシの商業捕殺とは全く関係のないフィリアザラシの捕殺で生計を立ててきた先住民のイヌイトであった。イヌイトのアザラシ皮製品は1983年2月の幼獣アザラシの皮とその製品の欧州共同体への輸入を禁止する閣僚理事会命令の適用除外となっていたが (Barry 2005: 70)、流通や消費の現場では1枚のアザラシ皮について、それが非先住民の商業アザラシ漁師によって捕殺されたものなのか、それとも先住民のイヌイトによって捕殺されたものなのかの区別は現実には困難である。非先住民の商業アザラシ漁師によって捕殺されたホワイトコート¹⁵⁾の皮製品が欧州市場から締め出されると同時に先住民のイヌイトによって捕殺されたフィリアザラシの皮製品も消え去る運命にあった。

以下、カナダ北極圏バフィン島の小集落クライドリバーに住むイヌイト (人口535人、1980年代) に与えた欧州共同体によるアザラシ皮およびその製品の禁輸の影響をジョージ・ウェンゼルの報告 (Wenzel 1991) に基づいてみる。

クライドリバーにおいては1979~80年にフィリアザラシの皮2504枚が販売され、それは5万7824ドルの価値を生み出し、1枚当たり平均で23.09ドル収入をもたらした。しかしながら、1984~85年には販売枚数532枚、全売上げ3719ドル、1枚平均6.99ドルとなった (Wenzel 1991: 124 Table 6.12)。

ウェンゼルによれば1980年、1枚のアザラシ皮 (23ドル) はスノーモービルもしくはボートによる1日の狩猟が必要とするガソリン代と弾薬代を支払いたが、1985年、1枚の生皮 (7ドル) は弾丸に必要な現金しかもたらさなかった (Wenzel 1991: 125)。また、1981年、成獣フィリアザラシの肉はクライドリバーに入ってくる可食生物量の約3分の2を供給していたが、1983年には2分の1以下となった (Wenzel 1991: 125, 126 Table 6.14)。

欧州共同体によるアザラシ皮およびその製品の禁輸以前は、フィリアザラシはクライドリバーのイヌイトにとって十分な食料源であり、また現金収入源であった。アザラシ皮の販売による現金収入があったからこそ、その現金で狩猟にかかる経費を支払えたのであった。

しかしながら、欧州共同体によるアザラシ皮およびその製品の禁輸以降、クライドリバーのイヌイトにとって (そして多分、その他の地域のイヌイトにとっても)、現金収入源は賃金労働か社会福祉になってしまった (Wenzel 1991: 124)。これが反アザラシ漁運動の一つの帰結であった。

では、反アザラシ漁運動団体は彼らの活動がイヌイトに与える (た) 影響をどのようにみていたのであろうか。

グリーンピース共同創設者の1人であり、1977年にはブリジット・バルドーと共にヘリコプ

ターで氷盤上に飛び、その後自らの反捕鯨・反アザラシ漁運動団体シー・シェパード (Sea Shepherd Conservation Society) を結成したポール・ワトソン¹⁵⁾は次のように語っている。

私には我々がグリーンピースで始めたことについて謝罪する理由はなかった。アザラシ生皮の禁輸はカナダとグリーンランドにおいてイヌイットに経済的な影響をもたらしうること、そして多分もたらすであろうことを我々は十分認識していた。一文化の経済への考慮は生物種の保護や苦しみを軽減する行動に影響を与えるべきでないとそのとき信じていたし、現在でも信じている。(Watson 2003: 195)

この文章は、グリーンピースの新執行部が 1985 年に同団体の反アザラシ漁運動に関してイヌイットに謝罪したことへの反論としてワトソンが述べたものである (Watson 2003: 195)。ワトソン自身もイヌイット社会内におけるイヌイットのアザラシ漁の文化的権利は認めているが、コロンブス以前にイヌイットはアザラシの生皮をヨーロッパ人に売る権利はもっていなかったとして、アザラシ皮の交易は終わらせなければならないとしている (Watson 2003: 195-196)。すなわち、現金経済化した現在の世界を生きているイヌイットに対して 500 年前の生存権しか認めていないのである。彼の世界観からすれば、イヌイットはスノーモービル、モーターボート、ライフル銃ではなく、イヌぞり、カヤック、手投げ鉞で暮らしていかなければならないのである。彼にとっては人権よりも動物権のほうが重い。

再び、彼の言葉である。

鯨たちが生き延びて繁栄し、アザラシたちが生きて子どもを産み続け、そして私が彼らたちの繁栄を確実にするのに貢献できるのならば、私は幸せです¹⁶⁾。

ブライアン・デーヴィーズやポール・ワトソンのおかげでホワイトコート の段階で捕殺されていたタテゴトアザラシはピーターになるまであと 2 週間、命を永らえることが可能となった。反アザラシ漁運動の成果がこれだけであったとするならば (少なくともタテゴトアザラシにとってはそれだけである)、商業アザラシ漁師やイヌイットが失ったものの大きさと比べて、それはあまりにも小さい。

3. 4. 反アザラシ漁運動の現在

2005 年 8 月、調査の合間にセント・ジョーンズ市内のダウンタウンを歩いていた時、ショールウインドーに少々刺激的なロゴの入った T シャツが飾られていた (写真 2)。「I ♣ Baby Seals」、訳せば「私は赤ちゃんアザラシを撲殺する」である。こん棒で仔アザラシを撲殺するのは伝統的なアザラシ捕殺法の一つである。また、こん棒は『海洋哺乳類規則』第 28 条においてアザラシ捕殺道具の一つとして認められている¹⁷⁾。「I ♡…」を振ったこの T シャツは、反アザ

ラシ漁運動団体によるニューファンドランドおよびラブラドル州の伝統産業への不当な攻撃に対する州民からの一つの異議申し立てを表すものであった。

2006年8月、このTシャツの製造販売元を訪ねた。2005年1月の販売開始以降、2006年8月の調査時まで同Tシャツは2303枚が販売されていた。この2303枚という売上げ枚数が多いか少ないかについては正確に判断する材料を持ち合わせていない。しかしながら、土産物として買う

ような品物ではないので、一定数（月平均115枚）が売れているということは、それなりの支持を集めていると判断することが可能である。アザラシ漁を擁護する動きも草の根から着実に広まってきている。

過去40年以上の歴史が証明しているように、アザラシ漁が行なわれている限り、反アザラシ漁運動は繰り返される。その運動は組織が事業として実施しているのであり、事業が継続するためには収入が必要となってくる。その収入の大半は大衆からの寄付に依存しており、そのためには常に大衆の目を引きつけていなければならない。大衆に飽きられれば、運動（および運動団体）はそれで終わりである。飽きられないために、運動団体は手を変え、品を変え、新（珍）奇なものを提供する。新（珍）奇なもの典型例は女優などの有名人であった。そのことはすでに見てきたとおりである。

2006年の新（珍）奇なものはポール・マッカートニーとその妻ヘザー・ミルズ＝マッカートニーであった。同年3月、同夫妻は米国動物愛護協会（Humane Society of the United States）およびその他の反アザラシ漁運動団体の企画によりアザラシ漁の解禁を前にセント・ローレンス湾の氷盤上を訪れ、ホワイトコートと戯れた¹⁸⁾。同団体ほかは夫妻を各団体のPR活動および反アザラシ漁運動に積極的に利用した¹⁹⁾。

ニューファンドランドおよびラブラドル州の地元紙によれば²⁰⁾、2006年3月3日、ダニー・ウィリアムス州首相とマッカートニー夫妻は米国CNNのテレビ番組「ラリー・キング・ライブ」に出演し、アザラシ漁について議論、同夫妻はアザラシ漁に関する情報の誤り、無知を曝け出した。番組中、ウィリアムス州首相がポールに対して「ニューファンドランド[島、州]に来て、アザラシ漁を現場で見て、議論しよう」と誘ったところ、ポールは「ご招待には及びません。私たちはニューファンドランド[島、州]のスタジオにいます」と返答した。しかし、実際には、彼らはプリンス・エドワード・アイランド[島、州]のスタジオにいたのであった。同番組における発言内容については発言転写録によって確認している²¹⁾。なお、余談ではあるが、マッカートニー夫妻はセント・ローレンス湾から帰国後の同年5月、離婚に向けての話し合いに入



写真2 「I ♣️ Baby Seals」Tシャツ
(撮影：浜口 尚)

った。その理由は定かではないが、あるいは氷盤上の冷たさが愛情をさめさせたのかもしれない。

同じく、ブリジット・バルドー（1934年生、73歳、昔の名前で出ています）もカナダを訪問、ハーバー首相に会談を申し入れたが、拒否された²²⁾。マッカートニー夫妻はかなり、バルドーも少しはメディアの注目を集め（無知でも何でもとにかくメディアの注目を集めれば、それでよいのである）、反アザラシ漁運動団体の広告塔としての役目は果たした。

マッカートニー夫妻の無知と傲慢さへの反発はカナダ国内ですぐに起こった。上述した「I ♣ Baby Seals」Tシャツの製造元は早速、「I ♣ Paul」、「I ♣ Heather」バッチを売り出した（写真3）。また、CNNの放送直後から、セント・ジョーンズ市内の毛皮製品製造販売業者の下に、カナダ全土からアザラシ皮コートの注文が殺到し、1週間で例年の2か月分を売り上げた²³⁾。カナダ国内だけに限るならば、マッカートニー夫妻の氷盤上への訪問は逆効果であったのかもしれない。

最後にイヌイットの反応を取り上げておく。タテゴトアザラシ漁へ反対運動が活発になればなるほど、巻き添えを食うのがフイリアザラシを捕殺しているイヌイットである。従って、彼らは非先住民商業アザラシ漁師と反アザラシ漁運動団体との諍いの傍観者であることはできないのである。

マッカートニー夫妻の氷盤上への訪問直後、2人のイヌイットの若い女性と仔牛をモデルにした「Save the Baby Veal」（仔牛を救おう）ポスターが製作された（写真4）²⁴⁾。そのポスターの意図していることは「欧米人は平気で仔牛を殺して食べているのに、何故仔アザラシ漁にそんなに目くじらを立てるのか」である。残念ながら、反アザラシ漁運動家、動物権擁護活動家たちにはこのきついジョークがわからなかったようである²⁵⁾。もっとも、ポール・マッカートニー、ポール・ワトソンなどは「極端な菜食主義者」（vegan）であり²⁶⁾、そもそもこのジョークを理解する文化的土壌をもっていないのかもしれないが…。

そのポスターの副題には「Avoid Cultural Prejudice」（文化的偏見を避けよう）とある。マッカートニーさんにもその意味を少しは考えてもらいたいものである。

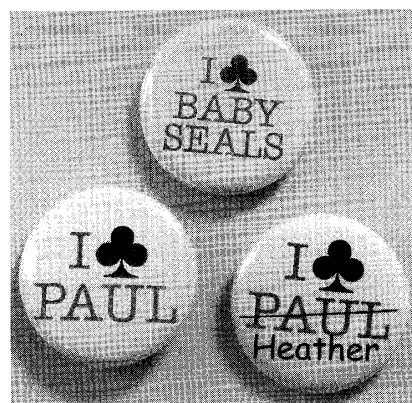


写真3 「I ♣ Paul」バッチ
（撮影：浜口 尚）

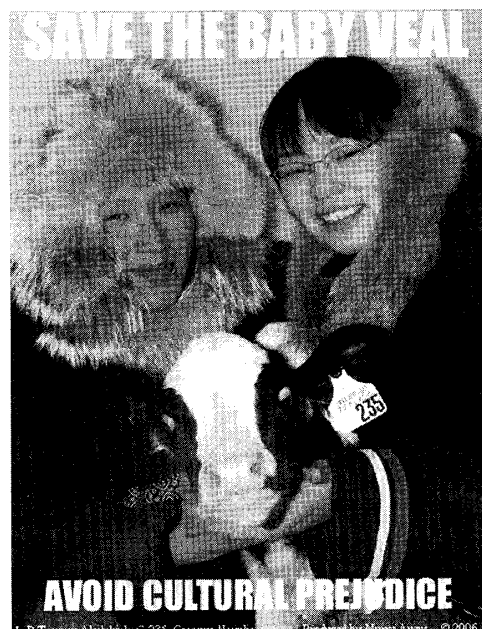


写真4 「Save the Baby Veal」ポスター
（©Murry Angus）

4. おわりに

2007年、アザラシ漁を擁護する側はユーモアをさらに洗練させた。今度のTシャツは「I ♥ Seals Roasted with Gravy」、訳せば「私は肉汁たっぷりに焼かれたアザラシ肉が大好き」となる（写真5, 6）。ニューファンドランドおよびラブラドル州のウィリアムス首相も早速このTシャツを1枚買い求めたそうである²⁷⁾。もちろん筆者も2枚購入、娘共々愛用している。

本稿においてはアザラシ類の捕殺およびアザラシ皮製品の利用に反対する運動（反アザラシ漁運動）を批判的に考察してきた。反アザラシ漁運動はアザラシ漁師を含めてニューファンドランドおよびラブラドル州の住民に対して何ら貢献をせず、その生活基盤を破壊しつづけている。1949年のカナダ連邦加盟以降、ニューファンドランドおよびラブラドル州政府は各種の産業振興、地域開発に努めてきた。しかしながら、自然・環境条件の大幅な改変が不可能である以上、新規産業は限られている。地域住民の安寧な生活の維持には、今後も商業アザラシ漁は不可欠なのである。

カナダにおいてはアザラシ類の資源管理に関しては諸規制に基づいた管理計画が確立され、科学的根拠の下で大衆の感情と市場の動向を勘案しながら資源の持続的利用が図られている²⁸⁾。資源が適切に管理される限り、アザラシ類は持続的に利用できるはずである。今後もアザラシ類の資源動向と反アザラシ漁運動の動静に注意を払っていきたい。

付記

本稿の基礎となる2005年8月および2006年8月のニューファンドランドおよびラブラドル州におけるアザラシ漁の調査は、平成17年度および平成18年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究A 課題番号15251012「先住民による海洋資源の流通と管理」[研究代表者・岸上伸啓国立民族学博物館教授]）を受けて実施した。岸上教授はじめ関係各位に記して謝意を表しておきたい。

注

- 1) 本稿にいうカナダ大西洋岸地域とはニュー・ブランズウィック州、ニューファンドランドおよびラブラドル州、ノヴァ・スコシア州、プリンス・エドワード・アイランド州、ケベック州、これら5州の



写真5 「I ♥ Seals Roasted with Gravy」
Tシャツ（撮影：浜口 尚）

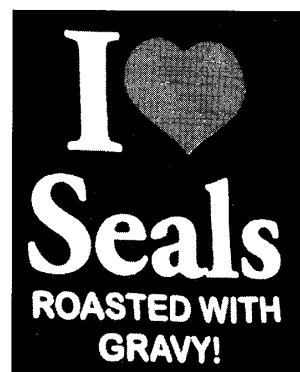


写真6 「I ♥ Seals Roasted with Gravy」
Tシャツ（部分拡大）
（撮影：浜口 尚）

大西洋岸地域およびセント・ローレンス湾岸地域である。

- 2) 1800年から1860年におけるニューファンドランドのアザラシ漁船によるアザラシ類の陸揚げ数1800万頭 (Candow 1989: 30)。1863年から1913年におけるニューファンドランドの蒸気アザラシ漁船によるアザラシ類の陸揚げ数1022万9817頭 (Busch 1985: 70 Table 1)。1914年から1951年にかけてのニューファンドランドにおけるタテゴトアザラシの捕殺数498万6721頭 (Busch 1985: 242 Table 7, 247 Table 8)。1952年から2006年にかけてのカナダ大西洋岸地域におけるタテゴトアザラシの捕殺数1119万8750頭 (IFAW 2007: 16 Appendix I)。これらの数字を合計すれば4441万5288頭となる。
- 3) DFO (Department of Fisheries and Oceans, Canada), "Facts about Seals 2006–2010." 27 Apr. 2006 <http://dfo-mpo.gc.ca/seal-phoque/reports-rapports/facts-faits/facts-faits20062010_e.htm>.
- 4) 2006年のタテゴトアザラシの捕殺数は35万4867頭、ズキンアザラシ同40頭、ハイイロアザラシ同984頭であった (DFO, "2006 Seal Quota Report, Catches to December 4, 2006.")。
- 5) 注4) 参照。
- 6) DFO (2003) 所収の統計表 "Seal Landings by Area and Species –1993 to 2002" (DFO 2003: 24) に基づいて計算。1993年から2002年までのタテゴトアザラシ捕殺数合計181万5747頭、うちフロントでの捕殺数合計125万4949頭。
- 7) 現在でもアザラシ漁の現場を見ずにその記事を捏造する人物はいる。2005年4月13日付けのボストン・グローブ紙にハリファックス在住の契約記者バーバラ・スチュワートは「約300隻のボートに乗った漁師たちが氷の海に集まり、何百というアザラシの幼獣を銃撃、氷と海は真っ赤に染まった」という記事を書いた (CBC News, "Sealing article fabricated, Boston Globe admits." 26 Apr. 2005 <<http://pei.cbc.ca/region1/servlet/View?filename=pe-seals-20050415>>.)。ところが、アザラシ漁はまだ始まっていなかった。2005年のフロントでのアザラシ漁の解禁は当初4月12日に予定されていたが、悪天候のため数度延期され、実際には4月15日に解禁されたのであった ("Boston paper sorry for false story." *The Telegram* (St. John's), April 16, 2005.)。悪天候のおかげでスチュワートの捏造記事は白日の下に曝されたのであった。
- 8) ピムロットは何度もアザラシ漁の現場に足を運び、その報告を書いている (cf. Pimlott 1966; 1967)。
- 9) ジャニス・ヘンケはその著作においてアーテック社のテレビ番組が一般大衆に与えた影響の大きさについて言及している (cf. Henke 1985: 68–71)。
- 10) 1977年3月16日、セント・アンソニーにおいてデーヴィーズが宿泊していたホテルの部屋と彼が乗り込む予定のヘリコプターの間で雪上で地元のアザラシ漁師、漁師、魚加工所従業員、教師、労組役員などが氷点下16度の中、「人間のじゅうたん」となった。デーヴィーズがヘリコプターに乗り込むためには人間のじゅうたんとを踏みつけていく必要があった。これに対して、カナダ連邦警察 (RCMP) がデーヴィーズの要請に基づいてその人間のじゅうたんとを1枚ずつ剥して排除、デーヴィーズの飛行を助けた。この出来事はニューファンドランドでは、「ニューファンドランドのアザラシ産業とアザラシ漁師が敗北した時」とみなされている (Patey 1991: 42–47)。
- 11) 「規則」とは一般的効力を有し、全ての点で拘束される法規。これは全ての構成国において直接適用される。これに対して「命令」とは達成されるべき結果については構成国を拘束するが、達成するための方式および手段については各構成国に委ねるという法規である (岡村 2000: 51)。
- 12) 欧州連合 (EU) (以前は、欧州共同体 (EC)) における立法過程は次のとおりである。欧州委員会が法案を作成、検討し、正式に採択した法案を閣僚理事会に送付し、さらに欧州議会にも送付する。欧州議会はその法案に対して意見を表明する。意見を受け取った閣僚理事会が、必要な場合は修正を行ない、法案を採択する。これにより立法過程は終了する。最終的な決定主体は閣僚理事会にある (須網 2000: 26)。
- 13) 注11) 参照。
- 14) 本稿における「ドル」は全て「カナダ・ドル」を表している。
- 15) ワトソンおよびシー・シェパードの反捕鯨活動については、別のところで考察したことがある (cf.

- 浜口 2005)。
- 16) Sea Shepherd Conservation Society, "Captain Paul Watson." 12 Aug. 2006 <<http://www.seashepherd.org/crew-watson.html>>.
 - 17) 『海洋哺乳類規則』第28条第1項「何人も次の道具を用いる場合を除いて、個人用もしくは商業用にアザラシを捕殺してはならない。(a) 全長60 cm以上1 m以下の硬木によってできたこん棒。少なくとも片端からの全長の半分は直径5 cm以上7.6 cm以下。(b) 以下省略。」*Marine Mammal Regulations*, 28. (1). 8 Sep. 2004 <<http://laws.justice.go.ca/en/F-14/SOR-93-56/text.html>>.
 - 18) *The Telegram* (St. John's), March 3, 2006.
 - 19) HSUS (Humane Society of the United States), "Heather and Paul McCartney Bring Hope, and a Media Spotlight, to Canada's Seals." 1 May 2006 <http://www.hsus.org/marine_mammals/marine_mammals_news/hope_to_the_ice.html>. HSUS, "Give Seals a Chance: An Interview with Paul McCartney." 1 May 2006 <http://www.hsus.org/marine_mammals/protect_seals/give_seals_a_chance.html>.
 - 20) *The Telegram* (St. John's), March 6, 2006.
 - 21) "CNN Larry King Live: Interview with Paul McCartney, Heather Mills McCartney." 1 May 2006 <<http://transcripts.cnn.com/TRANSCRIPTS/0603/03/lkl.01.html>>.
 - 22) *The Telegram* (St. John's), March 23, 2006.
 - 23) 2006年8月、同毛皮製品製造販売業者と面談。
 - 24) *The Telegram* (St. John's), March 14, 2006. なお、ポスターは「全国イヌイット青年会議」(National Inuit Youth Council)のホームページほかで公開されている。
24 Aug. 2007 <<http://www.niyc.ca/comment.php?comment.news.218>>.
 - 25) 1999年5月、グレナダで開催された第51回国際捕鯨委員会年次会議に出席した筆者は同様なことを経験した。ザトウクジラの仔を捕食するセント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国のベクウェイ島民を反捕鯨国が非難するのを受けて、日本政府代表団の一人が「欧米人は仔牛 (veal)、仔羊を平気で食べるのに、何故仔鯨だけを問題視するのか」と発言したが、鯨類を偏愛する反捕鯨国には通じなかった(浜口 2003: 411)。
 - 26) Joan Forsey, "Who's behind the anti-sealing protests?" *The Telegram* (St. John's), April 9, 2006.
 - 27) *Downhome*, January 2007, p. 32.
 - 28) カナダ政府のアザラシ類資源管理政策については別のところで詳細に論じている (cf. 浜口 2007: 180-191)。

文献

Barry, Donald

2005 *Icy Battleground: Canada, the International Fund for Animal Welfare and the Seal Hunt*. St. John's: Breakwater Books.

Bruemmer, Fred

1975 A Year in the Life of a Harp Seal. *Natural History* 84(4): 42-49.

Busch, Briton Cooper

1985 *The War against the Seals: A History of the North American Seal Fishery*. Kingston and Montreal: McGill-Queen's University Press.

Capdow, James E.

1989 *Of Men and Seals: A History of the Newfoundland Seal Hunt*. Ottawa: National Historic Parks and Sites, Canadian Parks Service, Environmental Canada.

Coish, E. Calvin

1979 *Season of the Seal: The International Storm over Canada's Seal Hunt*. St. John's: Breakwater Books.

Davies, Brian

- 1971 *Savage Luxury: The Slaughter of the Baby Seals*. New York: Taplinger Publishing.
- 1988 "Foreword." In D.M. Lavigne and K.M. Kovacs, 1988, pp.ix-x.
- DFO (Department of Fisheries and Oceans, Canada)
- 2003 *Atlantic Seal Hunt: 2003-2005 Management Plan*. Ottawa: Fisheries Resource Management-Atlantic, Fisheries and Oceans Canada.
- 浜口 尚
- 2003 「セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国ベクウェイ島におけるザトウクジラ資源の利用と管理—その歴史、現状および課題—」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』吹田：国立民族学博物館、401-417頁。
- 2005 「海の蛮人騒動記—シー・シェパードによる鯨・イルカ類追い込み漁仕切り網切断事件をめぐる—」『園田学園女子大学論文集』第39号、41-52頁。
- 2007 「カナダ大西洋岸地域における商業アザラシ漁の概括的考察」岸上伸啓編『先住民による海洋資源の流通と管理』吹田：国立民族学博物館、161-212頁。
- Henke, Janice Scott
- 1985 *Seal Wars: An American Viewpoint*. St. John's: Breakwater Books.
- IFAW (International Fund for Animal Welfare)
- 2007 *Seals and Sealing in Canada 2007*. Guelph: IFAW.
- Lavigne, David M. and Kit M. Kovacs
- 1988 *Harp & Hood: Ice-breeding Seals of the Northwest Atlantic*. Waterloo: University of Waterloo Press.
- Lust, Peter
- 1967 *The Last Seal Pup: The Story of Canada's Seal Hunt*. Montreal: Harvest House.
- 岡村 堯
- 2000 「EU法とは何か—EU法の法源—」島野卓爾・岡村堯・田中俊郎編著『EU入門—誕生から、政治・法律・経済まで—』東京：有斐閣、49-54頁。
- Patey, Francis
- 1991 *A Battle Lost: An Unsuccessful Attempt to Save the Seal Hunt*. Grand Falls: Robinson-Blackmore Printing and Publishing.
- Pimlott, Douglas
- 1966 Seals and Sealing in the North Atlantic. *Canadian Audubon* 28(2): 33-39.
- 1967 The 1967 Seal Hunt. *Canadian Audubon* 29(2): 41-43.
- Sergeant, David E.
- 1976 History and Present Status of Populations of Harp and Hooded Seals. *Biological Conservation* 10: 95-118.
- 須網隆夫
- 2000 「EUの意思決定過程」島野卓爾・岡村堯・田中俊郎編著『EU入門—誕生から、政治・法律・経済まで—』東京：有斐閣、25-34頁。
- 和田一雄・伊藤徹魯
- 1999 『鰭脚類—アシカ・アザラシの自然史—』東京：東京大学出版会。
- Watson, Paul
- 2003 *Seal Wars: Twenty-five Years on the Front Lines with the Harp Seals*. Buffalo: Firefly Book.
- Wenzel, George
- 1991 *Animal Rights, Human Rights: Ecology, Economy and Ideology in the Canadian Arctic*. Toronto: University of Toronto Press.

〔はまぐち ひさし 文化人類学〕